
晴れ太陽

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ太陽

【Nコード】

N75060

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

3年前の彼女が結婚する。

その時に、男は何を思うのか？何をするのか？

（前書き）

少し長いですが、けっこう面白いと思います。

晴天の太陽は、いつもより高い。そして、さんさんと降り注ぐ日の光は、いつもよりまぶしい。

右側からの日差しに、運転席の翔は目を細めた。初秋といっても、まだまだ日差しは暑く、じりじりと顔の右側を焼いた。

運転席の窓は開けてある。心地の良い風を浴びる。

エアコンはつけない。あのときのままだ。

信号待ちで、ふと左を見る。小さな公園がある。遊んでいる子ども達は、笑顔だった。思わず、微笑んでしまう。子どもが遊んでいる様子を見ると今でも微笑んでしまう。

あのときのままだ。ただ、あのときには、一緒に遊ぶ彼女の姿があったが。

見とれてしまい、後ろの車にクラクションを鳴らされた。

急いで、アクセルを踏む。グオンという音とともに、車は加速する。

あのときのままではない。あのときの車なら、べた踏みをしてもしろそろと動き出したに違いない。

車は変わったが、変わらないものもある。

憂鬱な気持ちのまま、晴天の日曜の昼下がりには車は走っていった。後、10分も走らせたら、目的地につくだろう。いや、目的地ではないのかもしれない。

何がしたいのかも、いまだにわからないのだから。

「俺らももう27歳かあ、早いもんだな」

翔の親友の隆が言った。隆は、翔と同じ大学で一緒に釜の飯を食

った仲である。同じ寮ということ、何をするにもいつつもつるんでいた。

「それで、最近の景気はどうよ？」

隆は、ビールを飲み干しながら言った。歩いている店員に、おかわりを告げた。

「悪くはないけど。どこも似たり寄ったりじゃないか？」

「そんなことないだろ？！今をときめく、フジサキ食品のエリートサラリーマンのお前が！テレビでやってたぞ、すっげーボーナス出たんだってな。うらやましいよ。」

フジサキ食品は、翔が入社した5年前までは普通の食品会社だったが、今、大流行している「唐辛子豆腐」の火付け役であった。唐辛子豆腐は、3年前、ガンの特効薬になるということが学会で発表され、一気に大流行したのだった。唐辛子豆腐を毎食食べ続けると、ガン細胞が少しずつ、確実に小さくなるということが判明していた。しかも、その製法は他の会社にはわからず、フジサキ食品だけが生産することも手伝い、会社はみるみる大きくなった。

しかし、フジサキ食品だけで生産していることから、唐辛子豆腐の値は跳ね上がり、一部の富裕層にのみしか行き渡らなかった。いまだガンは恐ろしい病気であることには変わりなかった。

翔は入社後、営業として働いていたが、自分の思いもよらないところでとんとん拍子で出世し、今ではエリートサラリーマンとなったというわけである。

「でも、俺は、何にもしてないんだ。会社が勝手に大きくなっただけで、俺が変わったわけじゃないからな・・・」

翔は、手元のグレイプフルーツサワーに目を落としながら言った。「あゝ、相変わらずネガティブな奴だな！そんなんだから、女にも逃げられるんだよ！」

「・・・そうだな。」

「ほら、だからそこでまた後ろ向きになる。そんなことないって、言い返すくらいのことできないのかよ！」

「・・・だって、その通りじゃないか。」

「だあかあらあ！お前って奴は、ほんとによー！」

と、言ったところで、新しいビールがきたので、隆は口をつぐんだ。
新しいビールを飲み、唇に泡をつけたまま、隆は続けた。

「いい加減、新しい恋もしろよ！もう沙希ちゃんと別れて3年だぜ！エリートサラリーマンで金があって、モテモテだろうによっ！」

「金はあるんだけどさ。なんか、そういう元気が持てなくて。」

「まったく、ま、それがお前の個性といたら個性だけどさ。沙希ちゃんが愛想つかしたのも分かる気がするよ。」

「ハハハ、全くだな。」

と、乾いた笑い。

隆という時間は、まったくもって翔にとって楽だった。こういう自分であることを受け止めてくれる。

「そっぴや、その沙希ちゃんなんだけど、結婚するもんなん。」

「えっ!？」

「うそ、お前知らなかったの？結婚式の招待状こなかったのか？」

「・・・うん、きてない。いつ結婚するんだ？」

翔は、めずらしく少し興奮気味に聞いた。

「もう今週の日曜だよ。俺は、仕事でいけないんだけどさ。」

「・・・そう、なんだ。」

明らかに落ち込んだ翔を見て、隆は気まずそうに言った。

「いや、そんじゃ、俺、そろそろ行くわ。明日、早くてさ。ごめんな、なんか。」

「いや、俺の方こそ、ごめん・・・」

「いいっていいって。んじゃ・・・元気出せよ。もう忘れろ。」

肩をぽんとたたいて、隆は席を立った。

翔は、グレープフルーツサワーを飲み干した。下のほうの焼酎が混ざってなかったのだろう、とても苦い味がした。

こんな日が来るってことはわかってた。もう3年、沙希も同じ年

だから27に今年でなるはずである。結婚しても全く不思議ではない。

翔も隆も沙希も、同じ大学で日々を過ごした。

沙希ははたから見てもレベルの高い女だった。そして、不思議な女だった。すらっとした長身で、腰ほどまであるロングの黒髪。切れ長の目と高い鼻で人形のような整った顔立ちであった。

いつも大学の中では取り巻きができており、そんな中でもおごることなく凜とした姿勢を崩さずに行っていた。

みんなでもどことなく一人にいる。そういう雰囲気を持っていた。

声をかけようと言ったのは隆である。たまたまその日は、取り巻きが誰もいなくて一人でいた沙希に声をかけた。

「なあなあ、同じ年だよな？俺、隆っていうんだ。こっちは翔、昼飯まだ一緒に食わない？」

いつもと同じように凜と姿勢を崩さずに、沙希は、
「いいわよ。よろしくね、翔君、隆君。」
と言った。

翔は、隆の後ろにいたが、自分がどうして先に呼ばれたのかずっと不思議だった。

後に聞くと、

「覚えてないわ。」

と、あしらわれたのだったが。

その後、なんとなく一緒に行動することが多くなった3人はいろんなことをして遊んだ。

どこにいても、沙希は凜としていたし、隆はおどけていた。

そんな様子を翔が眺めると言う感じであった。

沙希を狙っていた隆も、凜とした姿勢でスキのない沙希にはお手上げだったらしく、いつからか普通の友達として過ごしていた。翔自身も同じで、全く意識することがなかった。いつも沙希は凜としていて、人気者だった。

声をかける男も多かったが、スキがなく、手ごたえもなく、その上感じが悪いわけでもない、そんな沙希を攻略できた男はいなかった。

大学3年の冬である。

翔、隆、沙希、そのほか、大勢で行ったスキー旅行であった。

沙希はスキーも堪能であり、華麗なすべりを見せてみんなの喝采を浴びていた。

翔はスキーが初めてであり、立つこともままならなく、ズデンと無様に転ぶことも多かった。

みんなと別行動になって、ひとりで練習をしていたら、沙希が目の前に雪煙をあげて止まった。

「教えてあげるわ。きつとすぐに滑れるようになるから。」
「といって、個別指導をしてくれた。」

沙希の教え方は的を得ていて、ぐんぐん翔はうまくなり、小一時間も経つと、まっすぐは滑れるように翔はなった。

リフトに乗っている途中、翔は、沙希に聞いた。

「どうして、俺の先生になんかなってくれるんだい？みんなと滑ってた方が楽しいじゃん。」

「そうかしら？私は十分楽しいけど」

雪が降り出していた。ゴーグルをかけているので、いつにもまして表情が読めない。

「あ、分かった。隆か誰かが頼んでくれたんだろっ？」

「違うわ。みんなは、上の方で滑ってるって」

「じゃあ、かわいそうに思ってきてくれたんだ」

「かわいそうなんて思っていないけど。かわいそうって思って欲しいの？」

少し微笑みながら、沙希は言った。

「じゃあ、どうして？」

翔は言った。何にも思わずに。

「理由はないけど。あ、あるとしたら、好きだからかしら？」

と沙希は言った。トーンを全く変えずに。

翔は目を丸くした。

ドギマギしながら、翔は言った。

「・・・人にスキーを教えるのがでしょ？」

「あなたがよ。」

小首をかしげ、何？というふうに沙希は言った。

リフトは上につき、翔は何も言えず、ただドギマギしながらリフトを降りた。

降りると、みんながいた。沙希はなんにもなかったようにみんなに合流し、翔もおぼつかない足取りでみんなに付いていったのだった。

車は山の上にあるレストランに着いた。

太陽はちょうど真上にある。挙式は14時からとある。

今の時間なら、まだ客もいないはずだ。少しでも、沙希に会えるチャンスもあるかもしれない。

けど、俺は沙希に会いたいのだろうか？会ってどうするんだろうか？

自問自答を繰り返しながら、駐車場に車を入れる。

エンジンを切るものの、ドアを開けることができない。

俺は何をしたいんだろうか？

花嫁をさらいにきた？いや、そんな大それたことができるわけがない。

沙希と最後に話したい？沙希は結婚式の直前で昔の男と話したいわけがない。

誰と結婚するかもわからず、どんな恋愛をして結婚するのかもわからず、ただ衝動的に來たけれど、俺は何をしたいんだろう？

暑い日ざしが車内を照りつけ、じつとりと汗ばんできた。

じりじりと照りつける太陽の下、翔は、教会の前で右往左往していた。

27歳になろうと言う今も、優柔不断な自分が腹が立つ。

ドアを開けると沙希が待っている。今、どんな状況かはわからない。新郎と一緒にのかもしれない。着替えている途中かも知れない。俺は、何をしに来たんだ？

自問自答を繰り返しても、後一步が踏み出せない。

あのときもそうだった。

大学4年の春。

スキー旅行からというものの、なんだか意識ばかりしてしまって、翔は人知れず沙希を避けてしまっていた。

いきなり訪れた告白。どう対応していいのかわからなかった。

沙希が好きかといわれれば、鼻面に人參を下げられた馬みたいにうなずくだろう。非の打ち所のない女に告白されて、揺らがない男なんていないと思う。

でも、翔は、怖気づいていた。あの女性の横に自分が並ぶ。その事実恐れてしまっていた。

だから、近くにいけない。二人つきりになんてなれない。事態が動くのが怖かった。

沙希が自分のことを好きなんだ、と心の中に秘めて過ごすのも悪くないのも事実だし。

それでも、みんなで飲みに行ったり、遊んだりすることは今でもあった。

ある日、新入生の歓迎会があった。

大学4年生になっていた翔は、研究室の飲み会に義理で顔を出したのだった。飲み会などでバカになるのは好きじゃない。酔いつぶれる後輩達を介抱しながら、大学御用達の店のトイレと、飲み会の部屋を往復していた。

大学の近くの料理の仕出屋で、2階が宴会場になっている。

歓送迎会の時期には、大学の研究室がこぞって借りる場所である。価格は安く、冷めたザンギをビールで流し込むのが定番であった。

トイレに後輩を送り届けた翔は、隣の部屋でも宴会をしているのに気付いた。一気、一気の掛け声が聞こえる。

すつと、ふすまが開き、中から出てきた女性と目があつた。

目が合った瞬間、ドキンとした。沙希だった。

飲み会の最中だと言うのに、赤い顔一つしていない沙希の目が、翔の目を捉えて離さない。

硬直してしまった翔に、沙希が声をかけた。

「久しぶり」

「ひ、久しぶり・・・」

「飲み会なのね」

「うん、新入生の歓迎会」

「今の時期なら、どこも同じようなものね」

「・・・」

言葉につまる。沈黙が痛い。トイレから、後輩がフラフラと出てくる。

「せんぱあい、まだまだ、俺、イケるっすよ」

壁に寄りかかりながら、トロンとした目で後輩が言う。

「ああ、あ、もう、しょうがないな」

と、言いながら翔は肩を貸して、部屋に足を向けた。

「んじゃ・・・」

翔は、なんとか沙希に一言かけた。

目が泳いではいたので、ろくに合わせもしなかったが。部屋に戻ろうとした翔に、後ろから沙希が声をかけた。

「それだけなの？」

翔は足を止める。

「ねえ、それだけなの？」

沙希がいつもと変わらない調子で言った。

「私は、好きって言ったよ。それに対して、それだけなの？」

振り返ることもできず、翔は立ち尽くした。

「私は、あなたが好きなの」

翔の肩にかつがれていた後輩が口を挟んだ。

「うお、まじっすか?! 愛の告白じゃないすか?! すげー! ね、翔さん、どうするんすか?」

酒臭い息を吐きながら続ける。

「ってか、ってか、俺、邪魔っすよね。うわ、すげーきれいな人!

あ、もしかしてミズ大学の沙希さん! すげー、翔さん。マジすげー」

後輩は、叫びながら部屋に走って戻っていった。

「今さー、ミズ大学の沙希さんが、翔さんに・・・」

部屋の中では、とんでもない騒ぎになるだろう。そんな状況を、なんだか自分のものとは思えないように感じていた。

なんで、俺なんかを好きになっただろう?

翔は、いまだ廊下に立ち尽くしていた。

後ろにいた、沙希が歩き出し、翔の前に立った。

「行こ?」

手を差し伸べた沙希はにつこりと笑った。

「・・・いや、あの、あ、荷物、部屋だ」

「誰かが持つてくわよ。ね、行こっ」

と、言うなり沙希は翔の手を取り、階段を駆け下りた。

翔も転びそうになりながら、着いていく。

店を出ても、沙希はひたすら走った。翔はついていくのがやっとだった。

走って、走って、近くの公園まで行き着いた。

春とは言え、夜はまだまだ寒い。吐く息が白く輝いた。白い息は、空に消えていく。そして、星となり瞬いた。

少し息を切らした沙希が足を止め、振り返る。

その顔を見ても、翔は何も言えなかった。

「つきあおっか?」

沙希は、やっぱりいつもと変わらない調子で言った。

そして、翔も、やっぱり何も言えずに、こくんとうなづいたのだった。

夏の太陽は、あのときの星よりも高く高く輝いている。

あのと看、言えなかつた言葉を、言いに俺は来ているのだろうか？
いまだモヤモヤした胸のうちのまま、あのと看のように立ち尽くした。

「いらつしゃいませ」

声をかけられて、翔は飛び上がった。見ると、教会の入り口から黒服の男が出てきた。

「結婚式にご参加の方ですね？お待ちしております。こちらにどうぞ」

黒服は、教会の中に促した。きびすを返して逃げるわけにも行かず、恐る恐る教会の中に入る。受付まで通されるものの、翔は招待状すらもらつていなかった。

翔は、おずおずと言った。

「あの・・・招待されているわけではないんですが・・・」

受付嬢は翔を見て、言った。

「翔様ですね。お待ちしておりました」

受付嬢がほほ笑みながらいう。受付嬢らしい、スキのないメイクをした美人である。

「沙希様から、お手紙を預かっております。どうぞ、お受け取りください。」

すつと、封筒が目の前に置かれた。シンプルなどこにでもある封筒である。

中心には、

「翔へ」

とだけ書かれていた。

おずおずと封筒を受け取った。

「新婦から、招待状のない男性が来たら、翔様だとうかがっております。間違いないようですね。お読みになるのですたら、あちらの待合室をどうぞ。」

あくまで笑顔で受付嬢は言った。

手紙を書いていた・・・沙希は俺の来ることを知っていたのだらうか？

不審な顔した翔は、受付嬢に聞いた。

「あの・・・沙希は・・・いるのでしょうか？」

「いらっしやいますが、もし翔様がいらっしやったら、まず手紙をお渡ししてほしいということでした。それ以外は承っておりますので・・・」

「・・・会えないのですか？」

「存じません。基本的には、式前の花嫁には会えないことになっておりますが、新婦が望めば例外もありえます。」

「・・・はあ、そうですか。わかりました。」

仕方なく、手紙を受け取り控室に行った。

教会の中といっても、レストランも併設されており、今流行りのレストランウエディングができる形である。

また、遠方からの出席者に対する宿泊施設もついている。結構な広さであった。

玄関先の控室は、椅子と小さな机。机の上には、小さな水仙が飾られていた。

いつのまにか、手が震えていた。震える手で、封を開く。便箋が3枚。

内容は、こうだった。

「翔へ

この手紙を読んでいるということは、翔は私とひとつ屋根の下に

いるってことですね。

あの日、私が家から出ていってから一度も会ってないし、連絡も取ってないので不思議な気分です。今は、あの楽しかった日々を思い出しながらこれを書いています。

あの時、私はあなたの元を飛び出しました。私は、自分の夢を追いかけたかった。それは、あなたから離れたとしても。あの時、私は言ったよね。「私は、自分の店を持つことが夢なの。」あの夢は今でも変わってないわ。東京から来た、誘いの話はあの時、あの瞬間しか受けなかった。先輩の高橋さんから、店を任せたいっていう話を断ることができなかったわ。だから、私は言ったよね。『3年待つてて、3年たったら…』」

…覚えている。確かに、あの時、沙希はそう言って、その場から出て行ったのだった。俺は、その続きすら言えず、聞けず、何もできなかった。去っていく沙希は、振り返らずに出て行った。荷物も何も持たず。残された荷物に囲まれて、途方に暮れたものだった。

翔は、震える手で2枚目をめくった。

「あの後はね、本当はこう言いたかったの。『3年たったら、迎えに来て…』って。

私はね、あなたと付き合ってから、いや、付き合う前からずっと願ってたの。あなたが、自分の殻を破るのを。あなたに一目あってから、私はピンときいたの。『この人はすごいことをする人だ！』って。

私は、昔からいろんな人に声をかけられたわ。『付き合ってくれ』

って何人にも言われたけど、踏み込めなかったの。でも、あなたは違ってたわ。踏み込まざる

をえなかった！という感じなの。

あなたは、自分ではわかっていないだろうけど。あなたの中には、

何かあるわ。言葉では言い表せない、何かが。私には、わかるの。」

翔は、自分でもわからなかった。自分の中にある何か？なんの変哲もないこの自分に、何があるというのだろうか。自分でもわからないのに、沙希は俺の中に何を見ていたのだろうか。

「けど、今更こんなことをここに書いてもしかたないよね。私は、あなたの行く先を見たかった。3年たって、あなたが迎えに来たら全てを投げ打つてでもついていこうと思ってた

の。ただ、あの時はやっぱり自分の夢を捨てきれなかった。…後悔してるのかな？今のあ

なたを見てみたかった。結婚を後悔してる訳じゃないけど。

あの時、ああすることが本当によかったのかな？って思うの。もし、これをあなたが読んでくれているなら、私の想いを受け止めて受け止めて、自分の中の何かに目を向けてほしいの。あなたは、何かすごいことをする人だから。

沙希」

翔は、ふう〜つと息を吐いた。読みふけり、息をすることも忘れていたようだ。もう一度、もう一度、何度も何度も読んだ。一言一句を胸に刻み込むように、落とさず、

ゆっくりと、かみしめながら。

天井を仰ぎ見ると、小さな控室にはふさわしくないシャンデリアがあった。シャンデリアは、この部屋には合ってなかった。この部屋のような小さな俺に、彼女が合わなかったように。

彼女は、俺の中に何を見たんだろう。それは結局書いていなかったし、書いたとしても自分には何もわからないだろう。翔は、独り涙を流した。自分の不甲斐無さに、不甲斐無さに気づいても何もすることのできない自分に。そして、行ってしまった沙希を想って。

時間がどれくらい経ったのだろうか。受付の方が騒がしくなった。結婚式の招待客が来たのだろうか。

翔は、乾いた目元をぬぐい、立ち上がった。行くべき場所はただ一つだった。

ずんずんと教会の中に入っていく。

教会の人間が声をかける。「お客様、そちらは親族のみとなっております。」「制止を無視しながら進む。眼はまっすぐと前を向き、歩みは止まらない。」

そのうちに、走り出した。そして、「新婦控え室」と書かれた扉の前で立ち止まった。

ドアノブに手をかけたものの、すぐに手を離す。翔は自問自答をする。

「俺は、これを開けてどうしたいんだろう？開けて、いいのか？本当に、何も考えずに開けていいのだろうか？何人もの人生もかかっている…」

考えていたら係員に見つかってしまった。

「お客様、ここは関係者以外立ち入り禁止でございます。どうか、移動をお願いします。」

係員が増え、両腕を取られ促される。翔は、考え込んだまま、引きずられていた。

「俺は、何をしたいのか…結局、このままなのか…俺の中にある何か…」

翔は、掴まれていた両腕を振り払い、ドアに駆け寄った。ドアを叩き、叫んだ。

「沙希！そこにいるんだろう？いるならそのまま聞いてくれ！手紙を読んだ。この3年間、沙希のことを想って、想って忘れられなかった。手紙に書いてあったこと、俺の中にある何か、すごいこと、それは全然わからない、このドアを開けて、あの飲み会の時のように走りだせばいいのかもしれない、おめでとうと言って拍手をすることが最善なようにも思う。俺の中で、何をどうすればいいのかは

答えが出ない。出ないからこそ、俺は、このドアを開けちゃいけない気がする。このドアを開ける資格がないと思う」

ドアの奥で、人が動く気配があった。係員が駆け寄ってきて、翔の両腕を取って引きずった。それでも翔は、もがきながら叫んだ。

「俺は、俺は、あの時勇気があれば沙希を抱きしめることができた
と後悔している。今も、こんな風に叫んでいることを、後で後悔す
ると思う。でも、俺は、誓う。俺は、すごいことをやる！すごいこ
とってどんなことかもわからないけど、俺は沙希が言ってくれたよ
うにすごいことをやってみせる。俺の中の可能性をどうにかして沙
希に伝えるから。だから、いい、幸せになってくれ。こうやってわ
けわかんないことを叫んでいる男がいたとしても、いい結婚式にし
てくれ！とにかく幸せになってくれ。俺の中のすごいことは、沙希
を幸せにすることじゃない。いつか、いつか！」

翔はそのまま引きずられて追い出された。時間はまだ2時を回って
はいない。結婚式も予定通り行われるだろう、と翔は思った。あの
沙希のことだ、誰に聞かれても、

「私はわからないわ。昔の彼氏がおっかけてきたのよ。怖いわね」
くらいのことをサラリと言ってのけることだろう。その様子を想像
して、翔はちよっと笑った。

車を開けると、ものすごい熱気がムワツと出てくる。その車に乗
り込み、エンジンをかける。

そして、窓を開けて車を発進させた。

俺の中のすごいことってなんだろう。そして、それを伝えるって
どうすればいいんだろう。ただのサラリーマンでしかない自分にで
きることって、なんだろう…

自分に問いかける。いつもと同じような葛藤だったが、なぜだが

心はワクワクしていることに翔は気づいた。悪くない気分だった。

その10年後には、世界から「ガン」という病気は不治の病ではなくなった。唐辛子豆腐は、普通にスーパーで安く売られるようになったのだった。フジサキ食品は唐辛子豆腐の専売をやめ、製法を世界に向けて公表した。誰でも、どこでも唐辛子豆腐を手に入れられることができるようになり、ガンは風邪のように誰でもかかるが、治る病気となっていた。

その後、フジサキ食品は専売時代にためた資金で企業を大きくし、その後は宇宙進出の分野に着手。宇宙ステーションの設立に一役買うことになった。

その立役者が翔なのかどうかを、沙希は知っている。

（後書き）

昔書いて未完のものを完成させました。

荒々しいけど、今読んでもなんだか新鮮で、面白いと思いました。

さらっとしている作品だと思います。でも、ちょっと何かが心に残ってくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506o/>

晴れ太陽

2010年11月6日19時27分発行